



**Data**

監督：フランソワ・オゾン

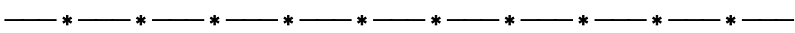
出演：ピエール・ニネ/パウラ・ベア/アントン・フォン・ラック/エルンスト・ストツナー/マリエ・グルーパー/ヨハン・フォン・ビューロー/シリエル・クレール/アリス・ドゥ・ランクザン

## 👁️👁️ みどころ

時代は1919年、舞台は敗戦国ドイツ。息子を殺された父親と息子の婚約者だったアンナ。そんな息子のお墓に、ある日戦勝国フランスからやってきた1人の美男子が花を手向けていたが、さてこの男は何者？

1932年に公開された『私の殺した男』が大胆にアレンジされて『婚約者の友人』として登場したが、なぜタイトルがそんなに変わったの？2人の間の国境を越えた愛は実現するの・・・？

アンナによる素人探偵の姿がミステリー調の展開を助長させていくが、戦勝国フランスVS敗戦国ドイツという対比を明確にしたうえで、2人の恋模様の展開を確認したい。しかして、マネの「自殺」の絵の登場をあなたはどう理解・・・？



## ■□■時代は1919年。舞台はドイツ。この家族は？■□■

第1次世界大戦の西部戦線における「塹壕戦」をテーマにした最高傑作は『西部戦線異状なし』（30年）だが、人類がそこではじめて経験した塹壕戦＝長期戦＝消耗戦の過酷さは想像を絶するものだったらしい。第1次世界大戦は1914～18年まで4年間続き、その結果ドイツは敗戦国になったから、1919年当時のドイツの惨状は容易に想像できる。そして、その塹壕戦に出征していた1人息子フランツ（アントン・フォン・ラック）を失った父親の老医師・ハンス（エルンスト・ストツナー）とその妻・マグダ（マリエ・グルーパー）、そしてフランツの婚約者だったアンナ（パウラ・ベア）の喪失感も想像を絶するもので、この家族が立ち直れないでいたのは当然だ。

もっとも、ヨーロッパ映画はそもそも説明が少ないうえ、フランソワ・オゾン監督の最新作もまさにそれ。冒頭には、黒いコートを着たアンナが1人でお花を買ってお墓参りするシーンが登場するだけだから、本作は一体何の物語かさっぱりわからない。ところが、アンナが訪れたお墓には誰かが新しい花を手向けていたから、これは一体誰が？セリフが全くないそんな展開が続く中で、観客はたちまち本作のストーリーに引きずり込まれていくことに・・・。

## ■□なぜ、『私の殺した男』から『婚約者の友人』に？■□

邦題を『婚約者の友人』とされた本作は、1932年に公開されたエルンスト・ルビッチ監督の『私の殺した男』をベースとして大胆に脚色された映画らしい。そして、『私の殺した男』の内容は、そのタイトル通り、塹壕戦でドイツ兵のフランツを殺したフランス兵のアドリアンが、戦後フランスからドイツを訪れ、フランツの婚約者であったアンナに「真実」を語るというストーリーらしい。したがって、本作がそれをベースにした物語というのなら、アンナが翌日再びフランツのお墓の前で目にしたフランス人の若者・アドリアン（ピエール・ニネ）は婚約者のフランツを殺したフランス兵・・・？

いやいや、本作導入部における2人の出会いやアドリアンがフランツの両親の家を訪れて歓待されるシーン、さらに、アドリアンとアンナが親しくなっていくシーンを観ていると、全くそんな雰囲気は感じられない。むしろ、それとは逆で、導入部に見るアドリアンはフランツがフランスで生活していた際のフランツの良き友人として終戦後の今は、フランツのお墓に花を手向け、フランツの両親の元を訪れているらしい。そして、そんなストーリーなら、アドリアンはアンナにとって「婚約者の友人」ということになる。なるほど、なるほど・・・。

そう聞くと、邦題にはそれなりに納得したが、それでは『私の殺した男』という本作のベースとなったストーリーは全面的に撤回されたの・・・？

## ■□婚約者亡き今、新たな恋の芽生えが・・・？■□

戦勝国フランスから敗戦国ドイツにやってきた青年アドリアンは美男子だし、バイオリン演奏もプロ級。そして、何よりもフランツのフランス在留時の親しい友人だったから、フランツの両親がアドリアンを歓迎し、アドリアンの話を聞きたがったのは当然。もちろん、それはアンナも同じだ。そうなると、アンナにとっては、死んだフランツの代わりにアンナに求婚しようとしていたフランツの父親世代の男・クロイツ（ヨハン・フォン・ビューロー）なんかよりアドリアンの方がよほど良いに決まっている。

その結果、クロイツから誘われた舞踏会は「踊る気持ちになれないから」と断っていたアンナは、アドリアンからの誘いは喜んで承諾し、楽しそうに踊っていたから、これにクロイツが怒ったのは当然だ。日本でも、太平洋戦争の敗戦後、東京に乗り込んできた進駐

軍の兵士と日本人女性との間にいろいろあり、それが多くの日本男児から侮蔑の目で見られたようだが、アンナがアドリアンに対して見せる姿は、息子を戦場で失ったドイツ人の父親たちにとっては屈辱そのもの・・・？

本作前半ではそんなシーンがたくさん登場するので、1919年という時代状況を踏まえつつ、ドイツVSフランスの敵対ぶり、とりわけ兵士だった息子を失った父親たちの思いを、しっかり理解したい。

## ■嘘も方便！しかし、これ以上は耐えられない！■

舞踏会でのアドリアンとアンナの接近ぶりを見れば、2人の間に好意（愛）が芽生え始めていることは明らか。そして、息子のフランツを失った両親もアドリアンに対して少しずつ好意を見せはじめたから、このまま順調にいけばひょっとして・・・？

そんな状況下でストーリーは急転換し、突如アドリアンは「これ以上耐えられない」と叫び、ドイツからの帰国を決めたから、ビックリ！これは一体なぜ？それは、互いに引きつけ合うように出会った夜のお墓で、アドリアンがアンナに語った驚くべき秘密によるものだ。その秘密とは、なんとアドリアンがフランツの友人だという話はすべて嘘。逆にアドリアンは、あの戦場の塹壕の中で偶然出会ったフランツを自らの銃で撃った男だということから、ビックリ！ならば、アドリアンが1人でドイツまでやってきてフランツの墓に花を手向けていたのは、一体なぜ？それはどうやら、「許しを乞うため」だったらしいが、そんなことを今更告白されても・・・。

アンナの心が乱れに乱れたのは当然だが、アンナはアドリアンの告白をそのままフランツの両親に伝えたの？しかし、それを聞けば両親の悲しみは如何ばかり？そう考えたアドリアンはその日からフランツの両親に対して「嘘も方便」とばかりに嘘で固めた生活に徹することに。さあ、そこから本作はミステリー的要素を含めて複雑な様相を呈していくことに・・・。

## ■舞台はフランスに！素人探偵の調査結果は？■

日本は四方を海に囲まれているから、かつての蒙袭来襲も撃退できたし、近時の難民の流入問題も深刻さが薄い。しかし、ドイツとフランスは陸続きだから、ある意味で侵攻しやすいし、ある意味で交流も深めやすい。フランツの両親はドイツ語しかしゃべれないが、アンナはフランス語もOKだから、フランス語で会話することもできたし、アンナがフランス語の手紙をフランツの両親に読んであげることもできた。しかし、アンナがフランツの両親に読んであげているアドリアンから来たという手紙は、どれもこれもあまり内容がないのは、一体なぜ・・・？

さらに、ある日アンナがアドリアン宛に出した手紙が「転居先不明」で戻ってきたから、アレレ？その結果、アンナが1人でフランスに行きアドリアンの動静を探ることになった

が、ドイツ娘が1人で戦勝国のフランスに乗り込み、アドリアンの所在調査という私立探偵みたいなことがホントにできるの？そんな不安でいっぱいだが、本作中盤からの展開を見ていると、アンナは何とかその役割を果たしているからひと安心。本作は、そのにわか仕立ての素人探偵調査の過程で、1919年当時のドイツVSフランスの立場の相違を、①息子を失った父親たちの視点、②ビールとワインの視点(?)等を取り入れながら、うまく対比させていくので、それに注目！

## ■□嘘で固めた人間関係はいつまで？■□

しかして、アンナがたどり着いたのは、大きなお屋敷のお坊ちゃまに収まっているアドリアンの姿。アドリアンがパリ管弦楽団のバイオリン奏者をしていたというのは本当の話だったが、アドリアンが死んでしまったというのはフェイクニュース。アドリアンは今は母親(シリエル・クレール)とともに大きなお屋敷に住み、そこには声楽家の美しい婚約者、ファニー(アリス・ドゥ・ランクザン)も出入りしていた。そのため「フランスの婚約者」として紹介されたアンナはアドリアンの屋敷で歓迎を受け、アドリアンのバイオリン、ファニーの声楽、アンナのピアノで小さな演奏会まで開いたが、今度はそこでアンナが「嘘も方便！しかしこれ以上は耐えられない！」とばかりにピアノ演奏を中止し、直ちにドイツに戻ると言い始めることに・・・アレレ、これは一体なぜ？

ドイツでも真の事情を知っているのはアンナとアドリアンだけで、フランスの両親は嘘の情報ばかり。そして、フランスでもアドリアンの母親もファニーも嘘の情報ばかりに囲まれていたから話があれこれとややこしくなったのは当然だ。アンナ流の「嘘も方便」の理屈は、アンナの告白を聞いた神父さんも承認していたが、ドイツでもフランスでも続いた「嘘で固めた人間関係」は、さて、いつまで続くの・・・？

## ■□1932年の視点と2017年の視点の相違は？■□

本作のベースとされた『私の殺した男』は1932年公開の映画だから、第2次世界大戦前のもの。周知の通り、第1次世界大戦で敗戦国となったドイツは、塗炭の苦しみの中からヒトラーが台頭し、ドイツが長い間フランスを占領したが、再びドイツはアメリカ、イギリス、フランス等の連合国に敗れることになった。したがって、本作におけるフランスVSドイツの対立と和解の描き方が、第2次世界大戦前の『私の殺した男』のそれと異なるのは当然だが、本作に見るその対比は興味深い。

11月5日には、トランプ大統領が来日するが、安倍晋三首相、松山英樹プロとのゴルフの話題ばかりに注目せず、日中韓そして北朝鮮の問題を、現時点でトランプ大統領と安倍晋三首相が如何に議論するか注目したい。そしてその際、本作の視点は大いに参考になると私は考えているが、さて・・・。

## ■□■あなたは、マネの「自殺」を知ってる？■□■

私は今年4月18日に徳島県鳴門市にある大塚美術館をはじめて見学した。そこではスケールの大きさに圧倒されながら4時間以上かけて数多くの絵画を鑑賞した。美術館自体はもちろん、マネの絵もたくさん見たはずだが、残念ながら本作に登場する「自殺」は見えていない。ルーブル美術館に所蔵されているこの「自殺」と名付けられた絵は、アドリアンもフランツも好きな絵だと言っていたが、その絵はタイトル通りかなり気味の悪い絵だ。なぜアドリアンもフランツもこの絵が好きだったの？また、はじめてそれを見たアンナも、なぜそれを好きになったの？

そこらあたりはフランソワ・オゾン監督の描き方では明確にされないが、本作ラストはこの「自殺」を前にアンナが某人物と並んで座るところで終わるので、最後までこの絵に注目！

2017（平成29）年11月1日記